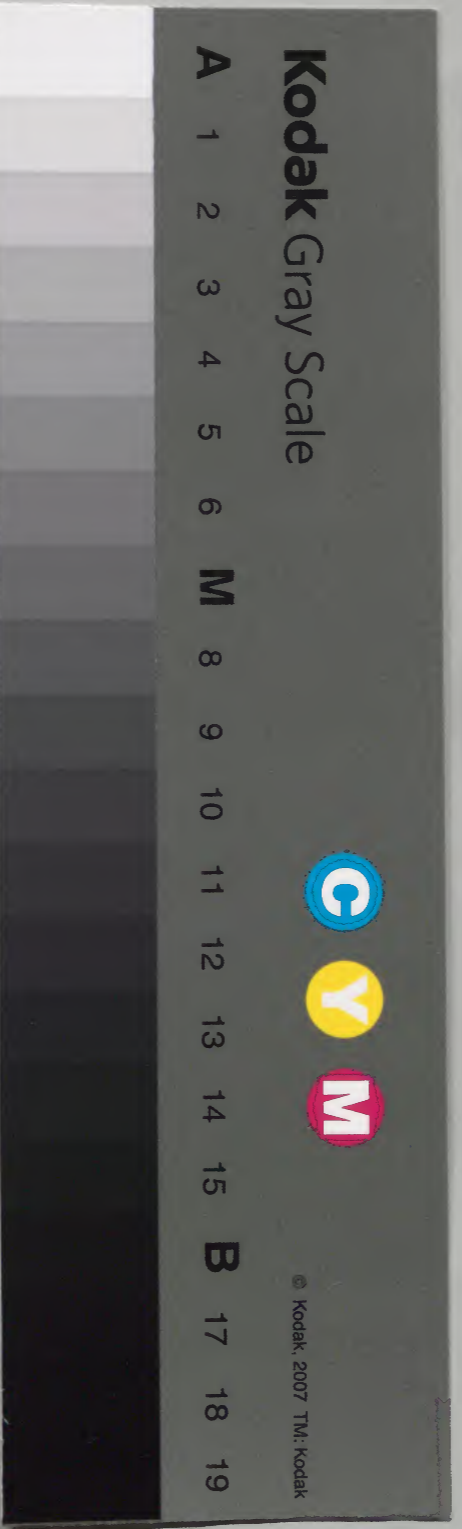


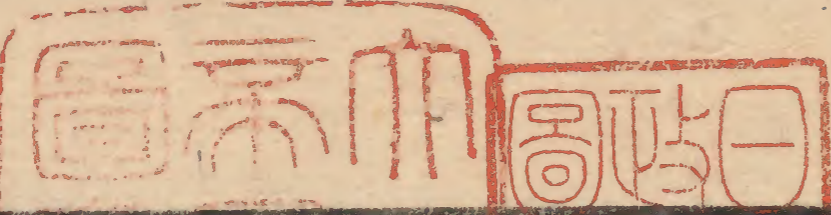
利根川圖志

| | |
|------|-------|
| 和書門類 | 二二九〇〇 |
| 函號 | 一三〇 |
| 架冊 | 一 |
| 冊 | 六 |

| | |
|-----|------|
| 和書類 | 三九〇〇 |
| 冊號 | 一三〇 |
| 架冊 | 一 |
| 函 | 七四 |

| | |
|------|---------|
| 內閣文庫 | |
| 番號 | 和 22900 |
| 冊數 | 6 (2) |
| 函號 | 174 117 |





利根川圖志卷二

明治十二年購求

下總 布川 赤松宗旦 義知 著

利根川上中連合

利根川の全流凡七十餘里その大小不因而これを上中下の三

分つ即本源上野國利根郡藤原の奥より二十八里餘を経て渡良

瀨川落合の處不至るこれまでを上利根川といふかくて武藏國

葛飾郡栗橋御關所の前不至て官渡あり房川渡といふ川幅凡三

里不以下分れて二支と爲る南を權現堂川といふ鳥川の東不權

准ず以下分れて二支と爲る南を權現堂川といふ鳥川の東不權

名起る此の川長二里許關宿不至り赤堀川の分支ある逆川を并

せ江戸川とあり下總國葛飾郡堀江新田不至て海不入る北を赤

堀川といふ長一里半許廣六十間より二百三十間不至る再分れ

て逆川と爲り平時ハ南して江戸川不落つ洪水の時ハ關宿の抗

行して中利根川不落この三川の間二島を爲す合せて五村島と

つ故不逆川の名あり

利根川上中連合

いふ佐伯川これを分つこの鳥始ハ五村あり一赤堀川の下即中
利根川凡十六里餘を經養川落合の下ふ至て下利根川と爲る
古昔利根川の流ハ今の處からて尚南方に在りき今これを古利
根川といふ今の利根川上中連合の邊ハ古の下河邊庄櫻井郷か
り古河より關宿邊までをいふ五ヶ村島の内江川中古鎌倉より奥
新田古名櫻井新田といへるもこの故あり
州不行むとてこの邊を過ぎ事疑ふ路を經て奥州道ハ木曾
か、り花輪澤入古峯原峠を越え終ふ高原峠を經て奥州會津ふ
入り、りあらむと下野鹿沼ある山口安良が押原推移録中巻ふい
へるハさる事にてこの許多の人の經過せし中遺物の有るハ
道とハ固より異あり
中田光了寺ふ藏せる静女舞衣あり静女ハこの邊なる下邊見よ
る由静女舞衣縁成氏朝臣の古河城ふ住し藤田氏の關宿ふ在り
起ふ見えとあり
一頃ハ士民羣集の街あるべし道興准后の村君武州埼玉郡に上
村有阿佐間の地郡を經て古川中田郡山ふ來り多ひ更に鎌倉より
鳥喰を過ぎて佐野舟橋の方に行き多へるハ文明十八年の秋か

りこの地後ハ北條家ふ屬せしが天正十八年小田原落城の後
東照神君ふ歸し元和止戈の後この處官渡と爲れり當時下野以
北ふ行くに必由の要路あり

利根川在下總國俗說飲此水者令人 羅山先生

夷齊設使飲貪泉 義氣清風不可遷

唯有古今天性在 癡人猶守利根川

日光山紀行この題題咏

總説こ、ふ盡く以下各地を記す

鳥喰 下總葛飾郡古河領の内鳥喰村あり日光山の道筋の少

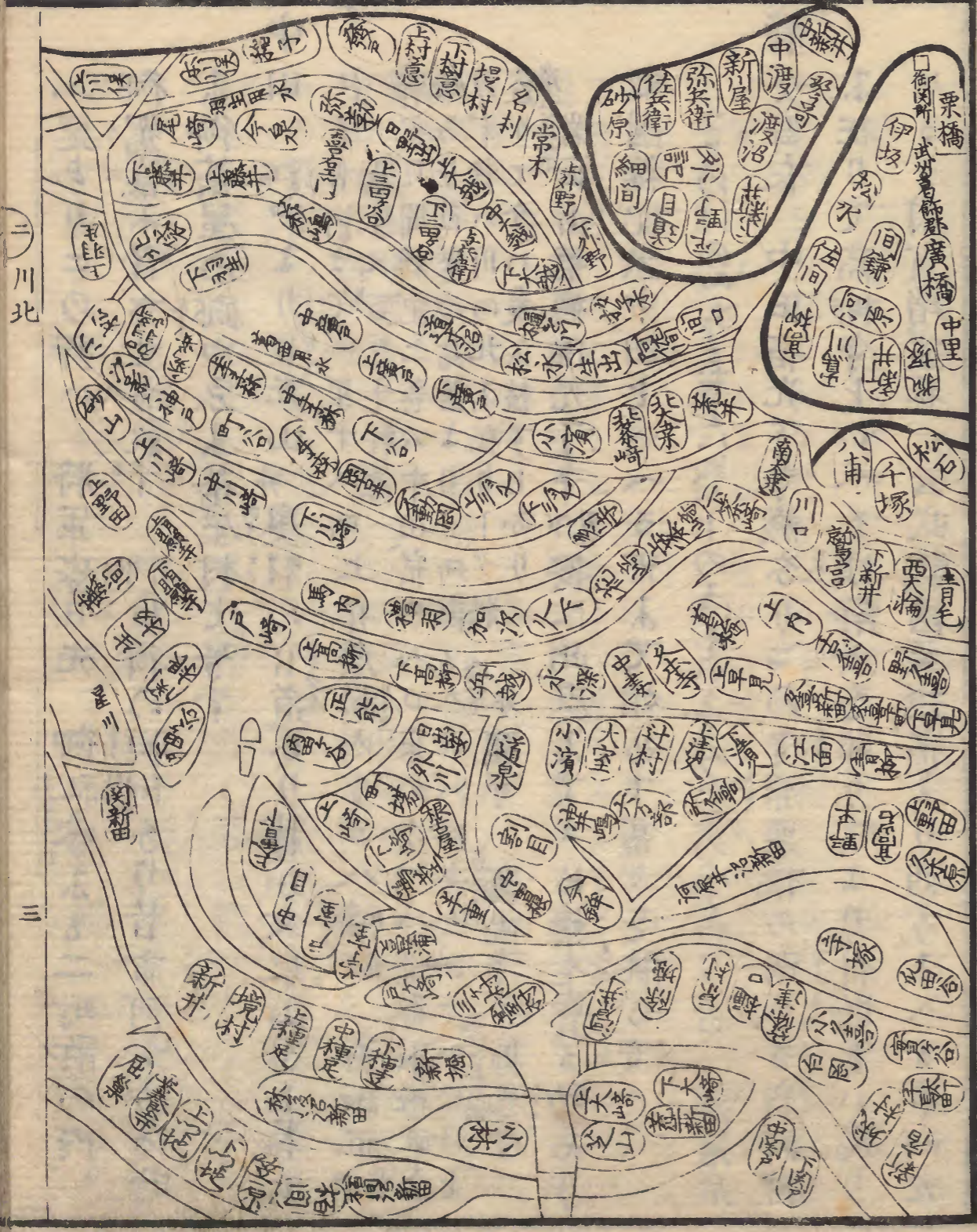
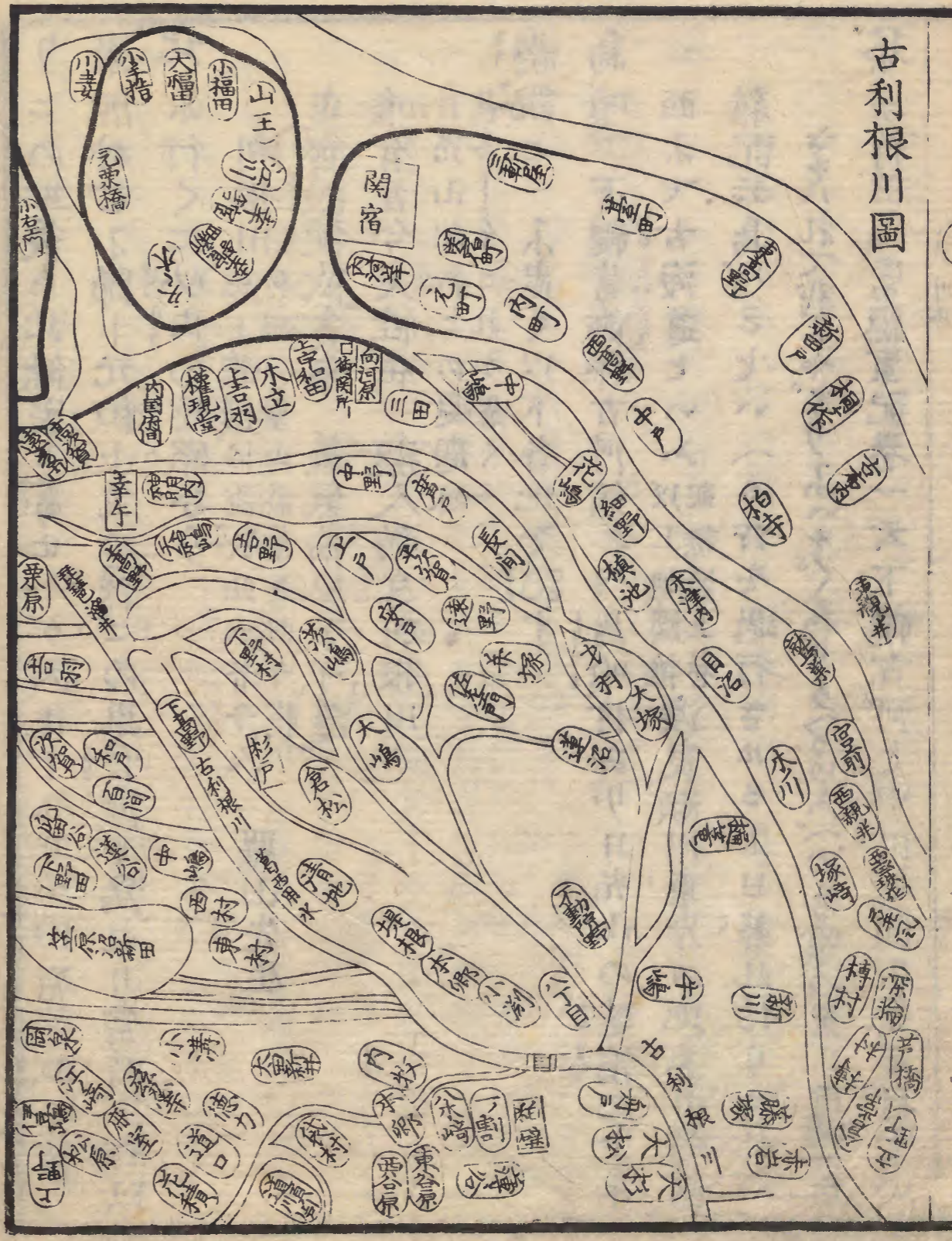
西ふて古海道といふ以上廻國雜 渡良瀬川東岸の地あり廻國

雜記云鳥バミといへる所を過行きなるふ日暮れ估りれば

さそハれて我もやどりふいそぐふりうへるゆふの鳥喰の里 道興准后

茶屋新田 常總軍記卷一云下總古河と中田の間ふ茶屋村とい

古利根川圖



三川北

三川

ふ處ありこの所ハ 將軍家日光 御社參ふも二町許の内
御駕籠不召させられず 御歩行の恒例なり昔古河公方の時
ふ御茶屋の跡ゆるふ茶屋村と号す

中田 江戸より日光山并奥羽の官道あり藤知文東山志上卷云

中田 古河まで一里十八町土井侯封内寺社八幡社 香取社
驛程見聞雜記上卷云中田宿の入口東の方に八幡香取兩社合
殿あり往來の鳥居より一町餘も入れバ社あり神さびていと
尊り昔ハ川の北不在り一町餘も入れバ社あり神さびていと
替りて今ハ爰ふ移すとあり 瀨 時宗 本願寺 萬福寺 淨光寺
淨土真宗 岩松山聖徳院光了寺 下按に此處ふてまめ藥を賣る効あり
廻國雜記云中田といへる所ふて始めて富士を眺めて

静女舞衣 中田宿光了寺藏ありこの寺原栗橋の南なる高柳村
ふ在りて高柳寺といへる頃静女を葬りてより什物とい爲り

るる閑窓瑣談卷一云武藏國栗橋宿より西方ふ入る事四五
ここのはのみちとおふぬ道ののをいふてみやこのふかむむ 道與准后

町高柳村の内松永といふ處ふ杉あり昔より一てこの杉を静
の塚と言傳ふ近頃中川君の立てさせ多ひ一碑あり静女塚と
記す云この説由ありてきこゆ 日光驛程見聞雜記上卷栗橋條
内室治戸といふ所ふ静の墓印の杉の大木あり静御前義經の
迹を逐ひ此所ふ來り奥の高館ふて戦死すと聞て俄ふ病で死
六丈七尺張り十五間圍二丈三尺今年五月關東の郡代中川飛驒
守賢を捐てその事を石ふ勒して樹下ふ立つとあり以上ハ
享和三年の事とぞかく二處ふ同人の墓あるハ一ハその侍女
琴柱の墓あるこの寺古ハ天台宗あり一が今ハ淨土真宗ふて
報恩寺末あり改宗の事静女舞衣縁起ふ建保年中宗祖親鸞上
浄土真宗光了寺と改号せり御弟子と爲り西願と法名給ハ
郎國村の次男出家して權大僧都法印圓崇といふとハ
この舞衣の事縁起云後鳥羽院の御宇一歳大早魃して耕草連
枝も枯果國民の愁安かりす貴僧を請卜兩乞執行まませと
も一滴の潤ち公卿詮義の上一百人の舞姬を集め神泉苑の
池ふて法樂の舞を舞ハせぬふ九十九人まで舞ハれれと

その驗ふし百人目ふ静既ふ舞ハむとせし時御棧鋪御簾の内
より御衣を下さる乃静頂戴してこれを著し舞ひこれハ車軸
の如く雨降りたり即この舞衣あり蛙蟆龍の舞衣といふ静の
事義經記卷五静吉野山に捨てりる、事條云一歳都ふ百日の
早の有りしこそ三院の御幸ありて百人の白拍子の中ふ静が舞
ひをさしこれより三日の洪水流れて百人の白拍子の中ふ静が舞
びをさしこれより三日の洪水流れて百人の白拍子の中ふ静が舞
ハ諸書の時に見えりこれに云猶卷六静若宮八幡宮へ参詣の事條等及
公頼朝公の御勘氣を蒙り落人とあり多ふ静ハ義經公のおも
ひ人かれハ鎌倉へ召され義經の御行方問ハせまませども
知りざる故御暇下さる静思ふ後義經公吾妻ふ忍び居るハむ
幸に是まで下り空く都に歸らむ事無念あり御行方尋ねむと
按に静が鎌倉ふ下りハ文治二年三月一日より義經朝臣
高館自盡ハ同五年閏四月廿日ありされハ静の奥州下りこの
時の事ハ非ず義經記本文よりハてんりうの麓ふ尼と爲り
行ひすまハ非ず義經記本文よりハてんりうの麓ふ尼と爲り
義經奥州より自害の由を聞て静尼ふありて名をさいヤウ
とつきて暫嗟峨の邊ふ在りハ後南都ふ住ミしとあり又奥

州の方へ下りしといへり侍女琴柱を召連當國下邊見と
あれハさる説も有りしあり侍女琴柱を召連當國下邊見と
いふ里まで下り多ふ然るふ往來の人々ロ々ハ義經公の御尊
申しなり静御あつかしく思ひ御行方尋ねられハ義經
公ハさる頃高館ふて空くあり多ふと語とあへず静泪ふ袖を
沾し實ふ頼少き世の有様せひ陸奥までも尋ね行らむと思ひ
しふ心を盡し、甲斐と無く浮世ふかかへハ剃髮深衣の身
とかりて義經公の未來御菩提を弔ハむと橋即下邊見を踰え
て日光驛程見聞雜記上卷茶屋新田條ふ是より東の方十町餘
の所ハ在る土橋を静御前の大堤といふ村の間ふ上水ありその
の所ハ來り奥州へ行かむや止めむやと思案せし所ありとい
ひ傳ふといひ下ふ寶曆七年この橋下の水を古河の前林とい
弘法の加持水ありとて参詣羣集し事水をいへり前林とい
ふ里ふか、り中畧自分手元の柳を引結び迷ひし道の印と爲
し都の方へ向けぬふこの所を静返といふ當寺三十町東前林
といふ所不在り結柳それより西ふ當り伊坂といふ里ふか、

静女舞衣圖

長三尺五寸

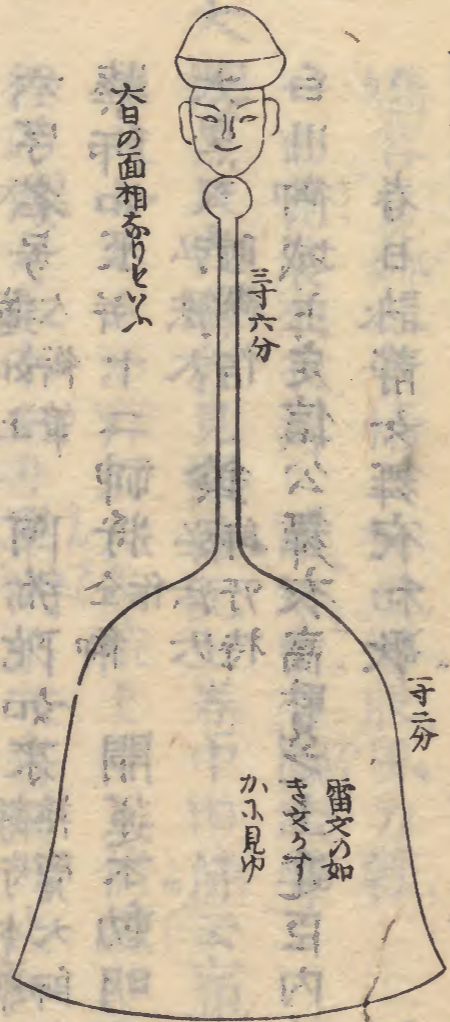
地黒く種々の絲にて文を繡せり

腰一尺五寸五分



弘法大師鈴圖

銅色甚古



底徑一寸七分五厘

大首の面相ありといふ

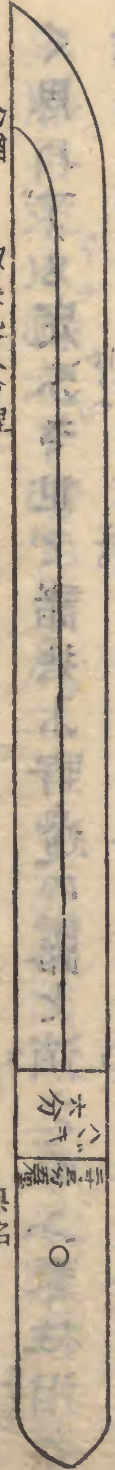
三寸六分

三寸二分

雷文の如き文あり
かゝ見ゆ

静女懐劍

義經朝臣所賜



胸長九寸八分程

六分

無銘

（ひびき）の鐵
子てその餘ハ木か
り木地のきゝあり

義經朝臣
門中

り多ひいふいと、さえ秋ハ物うき習なりけるふ旅の疲と均
 く思はずも定ふき世と諸共ふ野邊の露と消え多ふ琴柱泪と
 諸共ふ當寺ふ葬り一墓の印ふ一本の杉を植ゑおく今ふこれ
 を一本杉といふこの時守本尊 并頂戴の舞衣義經公形見の懷
 劍當寺ふ納り常什物と爲り畢ぬ
 聖德太子像 宗祖親鸞
 聖人御作
 鑑 義經公奥川御下向の時預けり
 即永錢一貫文御用立と傳ふ
 覺如上人御作
 法眼淨賀筆
 十字名号 蓮坐御影 繪御贊
 六字名号 蓮如上 阿弥陀如來 靜守本尊 師御作
 藥師如來 并十二神將 全御 開運不動明王 智證大
 師御作
 大黒天 師弘法大 鈴 師弘法大
 白川御城主定信公舞衣高覽之上近臣内外函被爲奉納者也
 春日詠靜女舞衣和歌
 源德純 新田氏
 やまのはふちまふ袖のまつろふぞたふひく雲も雨も六ある

題妓靜舞圖

大窪行

嬌容 鳥娜太多情 柳弄 臂肢風力輕
 一曲 霓裳羽衣舞 誰知 中有鬪牆聲

大櫻 日光驛程見聞雜記上卷中田條云宿より東の方一里足り
 ず大山といふ所ふ大光院といふ修験の寺あり寺内ふ圍三丈
 程の櫻の大木あり單辨ふて香ありといふ

熊澤蕃山墓 大堤鮭延寺ふ在り先生名ハ伯繼字ハ了介 又了號

ハ蕃山又息遊軒といふ備前ふ事へて功績あり文學ハ人の知
 る所ありその行狀ハ門人巨勢直幹の實記草加定環の行狀菱
 川大觀の傳記ありといひて先哲像傳卷二ふ定環の行狀をあ
 げり文中先生の功績をあげりるハ正保乙酉備前侯依京極
 主膳再求以祿之。于時先生歲二十七。備前國政大草承應甲午備
 之前中二州大飢窘迫及九萬人國者不知計爲乃委事於先生先

生出命施政。民大賑。尋修隄池。蓄瘠磽。上下得所。安遂設庠序之教。其舉皆出先生。及其家弟與焉。制減佛寺。壞淫祠。といへる。未て知るべし。後故ありて。備前を辭し。明石に在りて。松平日州侯。不事へ。侯の移封。不古河。不從。ひ上表。不因。て罪を。幕府。不獲。頼政。郭。不。禁錮。して終る。元祿四年辛未八月十七日。壽七十三。鮭延寺。不葬。り。儒禮。を用て。す。この寺。ハ鮭延。越前の舊。臣主の爲。不建。つる所。あり。鮭延。ハ出羽の地名。越前。ハ最上。義光の舊。臣事。ハ常山記。談明良。洪範等。不見。え。たり。

三島大明神社。水海村。不在。り。廻國雜記云。下總國。こ。不。りの山。といへる。所。不。伊豆の三島。を勸請。し。奉りて。大社。ま。しく。り。かの別當の坊。不。暫。逗留。し。たり。ける。内。不。哥。ふ。と。度。々。い。ひ。す。て。と。も。少。々。書。し。お。き。け。る。

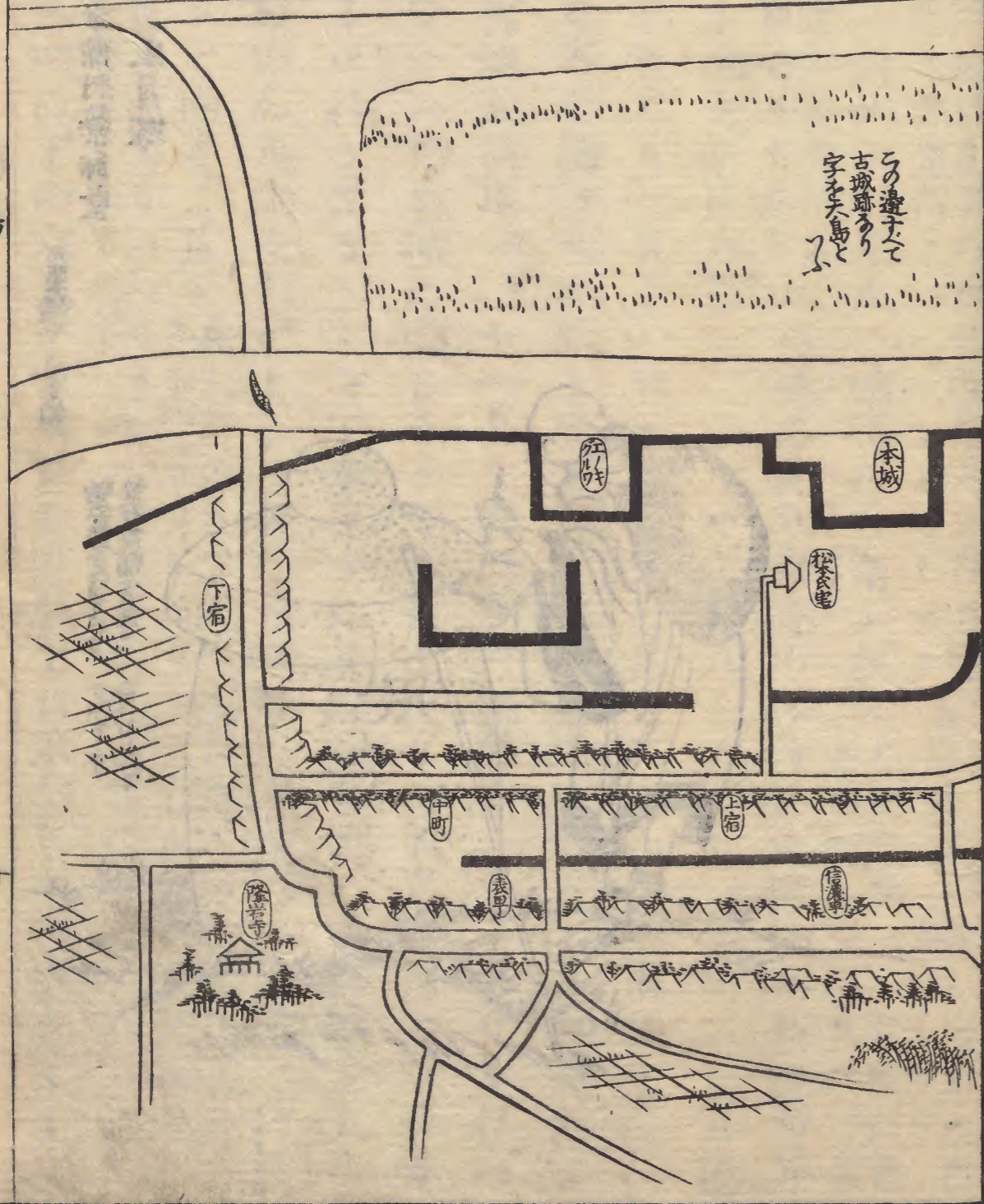
たづね。來。て。と。ふ。こ。の。お。か。し。名。を。お。ま。ぞ。づ。の。ま。ほ。神。風。道。興。准。后。標。注。云。下。總。葛。飾。郡。郡。山。郷。水。海。村。不。在。り。三。島。大。明。神。社。領。五。石。

別當滿藏院古河よりハ東の方栗橋の北東に在る村あり。云々。接。后。同時。富士。蟲。初。雁。葛。菽。の。吟。諸。國。主。齊。錄。下。總。國。部。新。義。眞。言。の。あり。こ。の。處。の。歌。枕。と。す。べし。諸。國。主。齊。錄。下。總。國。部。新。義。眞。言。の。中。に。五。石。三。島。社。別。當。葛。飾。郡。郡。山。郷。水。海。村。滿。藏。院。と。見。え。たり。こ。の。餘。曹。洞。宗。不。十。法。華。宗。不。五。石。葛。飾。郡。水。海。村。吉。祥。寺。二。石。葛。飾。郡。水。海。村。正。藏。寺。を。載。せ。たり。日光驛程見聞雜記上卷中田條云。又一里東。不。水。海。村。あり。昔。梁。田。家。の。領。せし。所。あり。その。村。の。名。主。鰐。口。を。所。持。す。是。ハ。三。島。明。神。へ。寄。進。せし。物。あり。文。龜。三。年。八。月。日。梁。田。右。京。亮。平。宗。助。と。鑄。付。り。て。有。り。同。村。不。北。條。氏。直。が。虎。の。印。を。居。え。る。旋。書。を。所。持。し。る。百。姓。あり。惣。て。こ。の。邊。不。梁。田。家。臣。下。の。子。孫。多。し。こ。の。所。中。田。を。の。名。高。き。繭。の。藥。を。賣。る。齋。藤。源。太。左。衛。門。と。先。祖。ハ。彼。の。家。の。老。ふ。り。梁。田。ハ。五。十。万。石。程。領。せし。大。名。不。て。有。り。ける。と。そ。本。注。按。不。右。京。亮。宗。助。ハ。康。正。の。頃。古。河。の。成。氏。不。屬。し。上。杉。と。戦。ひ。し。出。羽。守。が。子。孫。ある。べし。梁。田。ハ。關。宿。の。城。主。あり。云。云。

五ヶ村島 下總國葛飾郡不屬す南ハ權現堂川北ハ赤堀川東ハ逆

三島

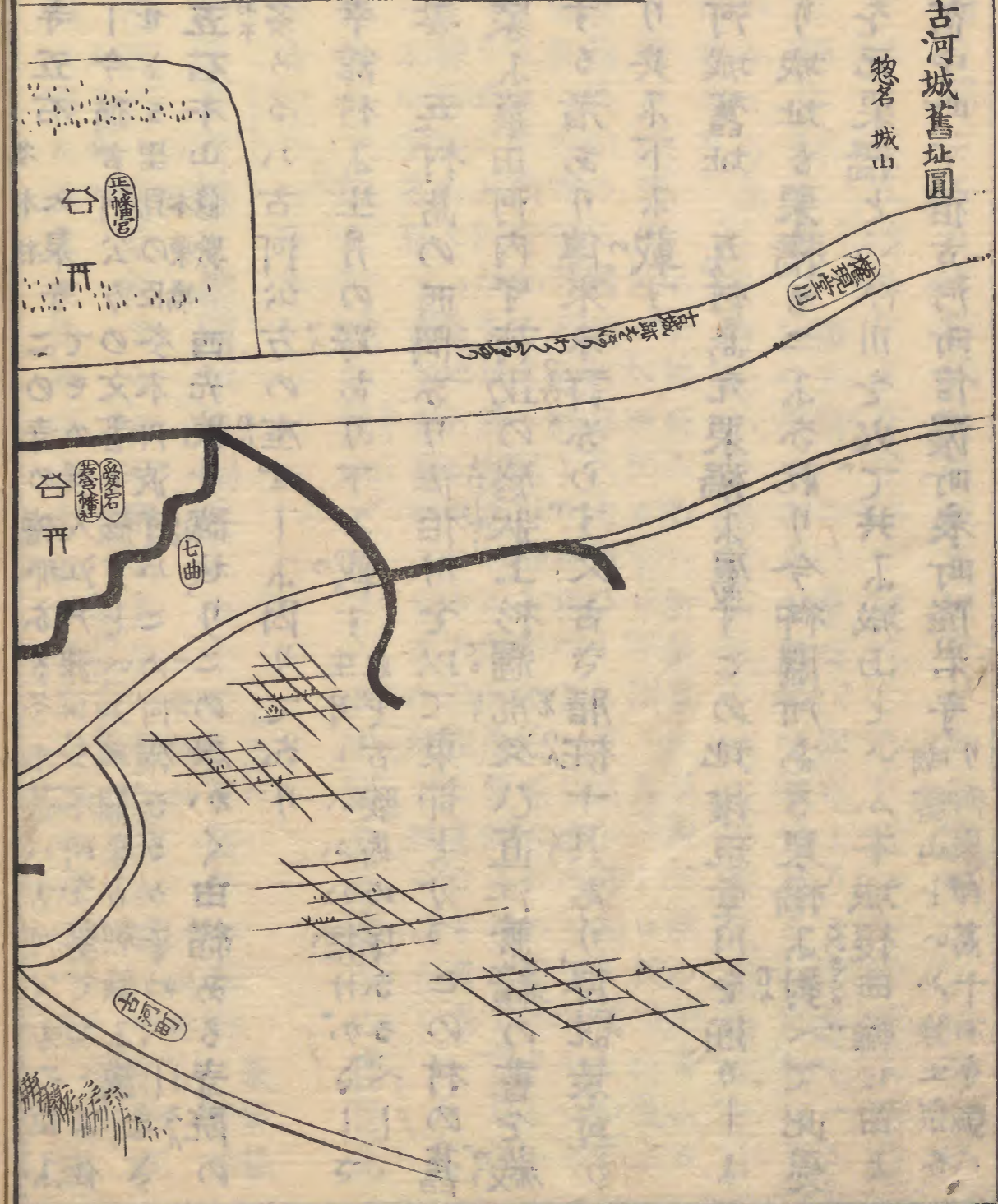
八



古河遺跡
古河跡より
字天鳥

古河城舊址圖

惣名 城山



正權宮
谷開

愛宕
谷開

七曲

加原田

幸館村薬師堂
生月塚

元栗橋隆岩寺領

物高四尺寸五分 高三尺寸
笠石前幅一尺寸 奥行一尺寸



岡崎信康君の法號嘲雲院殿隆岩超あき愛宕若宮八幡社七曲の内
 越大禪定門といへるふとるといハ川北不在正八幡宮ハ川南不在外國府間と小右衛門新
といふ古河ふこの城の起立詳かりず今の古河城ハ長祿元年
由ある名あり不成氏朝臣の築く所ありさてそれより七十年前ある至徳
 三年五月七日小山若丸官方と爲りて小山在祇園城不籠れ
る事を鎌倉大双紙上卷ふ記して鎌倉殿ハ七月二日御發向古
河城不御座中畧十一月不鎌倉へ御歸陣ありといへりされハ
今いふ御番城の類あるうさる因ふ由りて成氏朝臣とこの邊
不止れるあるべして永享十二年結城合戦の時結城方より
 野田右馬助を大將として矢部大炊助以下古河城を繕て楯籠
ると同書不見ゆ按不野田ハ下野國篠田郡の地名あり嘉慶元
書ふ記せるハ年丁卯五月十三日古河住人野田右馬助と同
り移れるあるべその明年ある嘉吉元年四月十六日結城
 落城の下の文不同十七日古川城を北攻べき由相觸れりる

くしん
福尾守

槐系守

為所書法を授けり
はまぬき
多りぬ 圓音中の
法念可有 仁 善
つひに希し法を義重を伴

培月河初漲名
多早心
海國
法
遊
之

七月廿九日

七月廿九日

蘇子瞻

提原慶

蘇子瞻

川妻隠里膳椀圖説

圖する所ハ下總國葛飾郡川妻村名主藤沼太郎兵衛家藏あり昔藤沼氏野州河合里より來りてこの村を開くといふ村中ハ隠里あり饗應ある時ハそこより膳椀を借り來り事畢て、還す例あるが故ありて十具を遺し家傳へさるが今猶一二を存すといふ朱漆古様頗奇品あり然れども神鬼の作不似す傳へ聞く佐渡國雜太郡二岩不彈三郎狸ありて人ハ金を貸しにりそハ借るべき金の員數と還すべき日限を記し名印を押して置きぬれば翌日穴の口ハその金を置けりとぞ後ハ還さざる人多あり一ハ金を貸す事を止めて膳椀等を借けるがこれさへ假さずあり不きといへりこの川妻のとざる類不や有りむ彈三郎狸の事ハ燕石襍志卷五及び諸國里人談等不載せて人の知る所あり



累年之志信於心

永之藝城志直以象

海心藏於石少以

然之若國日被下之

於諸之粒心之初喜也

可為所公也

壬午年 申 戌

六日方持物

羽部大隅守殿

處不野田右馬助以下の人々結城を根城として楯籠りたるが
落城の由を聞て寄手の未近うざる以前不船不取乗り行方不
知落ちふれり矢部大炊助以下残留りて野田讚岐守不誅と
いへりその古河といふハ古利根川不因れる名あるべし城天
正の頃不も有りしと見えて今の古河城修覆の間小笠原今の
信州侯權不移住せる事あり隆岩寺ハ其時の草創といふ今
古河城ハ康正元年六月十六日京都將軍義政公今川範忠不命
ド鎌倉を破る不及て成氏ハ總州葛飾郡古河縣鴻巣といふ處
不權不屋形を立て關宿城不築田を籠め野田城不野田右馬助
を籠置といふ事鎌倉大双紙下巻不見ゆ日光驛程見聞雜記古
河條云宿より西の方
四五町不鴻巣といふ所あり古河公成氏の御所跡この後成
とぞその名のこいひ傳ふ烟ふてその形も知れず
氏ハ武州國府不落ちそれより總州葛飾郡古河縣不落着敗軍
の士卒を集め下河邊城不籠り多ひると同書不いへり是今
の古河城ありそハ下河邊ハ古き庄名あるが成氏朝臣のこ、

不座せしより縣の大名を稱する事とありしあるべし按不永
亨記不
成氏ノ移ラセ玉フハ故下河邊庄司行平ガ館ト聞エシ古河城
ナリ其後城南鴻巣トイフ處ニ有御所作といへるハ前後の差
あり松本勘兵衛といふ人あり古より古城迹不居て其處の事を
掌れり城迹草地堤堀共不六万坪外不田地十三町歩を有ちま
りしといふ今ハ古不如くすとあむ

ついに不ハみやの乾何とあり古城山とひときつふあり古城庵
松本可成

沙山 元栗橋の新田トヨブ不在り方二町許と、不登りて一望
すれバ川流四面を圍匝し富士日光筑波の山々雲間不出没し
て風景最佳し春夏の間雅客遊觀の處とす

富士見渡 江川より關宿向河岸不渡る處あり富士の眺望此處
を最勝とす

六國山東昌寺 山王村東昌寺不てハ山王山村といふ在り築田
御朱印文言不從ふあり
河内守滿助の菩提寺あり禪宗

制札寫

條々

下総國

東昌寺

一當寺同門前百姓等急者可還位事

一寺家門前不可傳之等回畑之毛不可妨之事

一對寺中門前輩狼籍非分、族於有之者可為一淺切事

右若於遠犯、軍志忽可法處嚴科者也

天正十八年六月 日

鐘銘

大日本下總州下河邊庄櫻井卿六國山東昌禪寺大鐘

願主 大旦那 築田河内守持助

時文明八年六月廿四日 住持毗丘即菴老衲

關宿城 二の城ハ古河公方の臣梁田氏の築く所あり梁田ハ從

來下野國人ふて今ふも下野ふ梁田村あり世々鎌倉公方に事へりか

くて永享十年十一月一日築田河内守同出羽守等持氏卿の相

州大藏御所を留守一三浦介時高と戦ひて死すこの後嘉吉元

年四月十六日結城落城の時持氏卿の息春王安王の爲ふ築田

四郎ハ長尾因幡守討され同出羽三郎ハ武田刑部少輔入道

討されりかくて寶徳元年九月九日春王の弟成氏朝臣關

東の都督と爲るふ至て結城の一黨と同く出頭の臣りこの

後康正元年六月十六日京都將軍義政公の命ふ因て今川上總

介範忠鎌倉を破るこの時成氏朝臣ハ下總國葛飾郡古河縣鴻

巣ふ移りて關宿城ふ築田を籠めり由鎌倉大双紙下巻不見

ゆその明年正月十九日成氏朝臣の命ふ因て南圖書助等と同

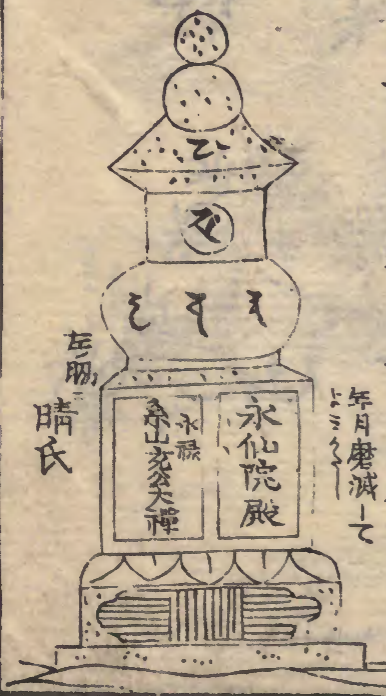
く千葉介實胤の有る下總市川城を陥るこの頃築田河内守

ハ關宿より打て出て武州足立郡を過半押領一市川城をとる

と同書不見えりこの後築田中務大輔頻ふ上杉と和親の事

を勸むこの後變革千般あり弘治二年十二月十五日北條氏康より晴氏義氏兩君を關宿城へ移し築田中務少輔政信をして守護せしめざる事關東古戦録卷六に見ゆこの後上杉輝虎を防ぐむとて加勢ふ來りし結城六郎晴朝と永祿三年正月四日柳橋ふ於て誤て同士軍せし事同書卷九に見ゆかくて天正元年閏十一月十七日築田中務大輔政信同出羽守綱政佐竹義重ふ降るを以て北條氏政の兵ふ敗りれ佐竹の遊客と爲り城ハ北條家ふ屬せる事卷十九に見えりさて同十八年七月十一日小田原落城の後同八月九日領地拜領中畧下總國古河小笠原信濃守秀政同關宿松平三郎太郎康元同關宿内岡部次郎右衛門長盛一萬二千石任内と房總治亂記不見えり因州侯の墓碑ハ臺町ある觀照山宗榮寺ふ在り當寺開基大興院殿前因州太守傑傳宗英大居從四位少將松平氏源康元墓行年五十四日と鐫り背面ふ爲當寺康元之墓草創年來而自破壊于時明和三丙戌歲八月十

四日從五位下源朝臣松平久世家の領と爲りしハ安永三年ふ因幡守康卿修補之とありりかり今不至るまで嗣封の君侯世德澤を布き多ひて萬民鼓腹し市鄽繁榮あり東ふ臺町南ふ江戸町内河岸元町内町あり内河岸の對岸ハ向河岸ありこの二處問屋船宿多く最繁華あり江戸ふ行く旅人舟ハ向河岸より出づ江樓ふ柳樽を開き江岸ふ柳枝を折るその景況喻ふるふ物あり寺院ハ國花萬葉記卷十ふ松窓寺洞家關宿在り寺領廿石と見え諸國圭齊録下總國新義真言部ふ十五石昌福寺と見ゆ古河晴氏朝臣墓 宗榮寺後の園中ふ在 高五尺許土人字して御所卵塔といふ晴氏朝臣ハ永祿三年五月廿七日卒を法號ハ永仙院殿系山道統あり





寄生
木樹

川南

三十二



蛇
柳

大柳 關宿城東半里許葦場といふ處不在り故に葦場の大柳といふ中利根川より三四十間南方堤の内園の中あり廿年前ハ枝の下一丈許ありといふ今ハ草地と爲れり大枝三不分ラれ各太三四圍南北延衰十四五間許南の枝不朴樹の寄生あり大四尺許その本幹の蟠る不因て命にて蛇柳といふ一奇事あり時としてこの柳川北不見えて夜行の舟不方向を失ハ一む此蓋層樓の類ふ一て川北の空氣不映ずる者あり是を以てまゝ妖柳といふ

堀割 關宿の邊ハ卑溼ふ一て水患多一故不嘉永の初領主より命一て城東ある桐作木間瀬舟形木崎等の村々六里の間不水道を作り水堀より利根川不落一永く水患無かり一む民甚これ不頼るこの桐作不眼科醫鳳梧あり畫を好む

つけ、けてそろこのむきぬぐこづけてまひあがる

これハツケタゲといひて古き相歌の由鳳梧この邊の事とと談る因不言へり

お、腹くつてう明神 水堀村不在り傳聞往年三月初午の日利根川洪水不て大ある木の方不一て中不穴あきころが流來り一を朝艸刈る者共これを上とむと爲一うと重さ白の如く不一て揚らず乃繩不て柳不敷置村人を聚め各飽食せ一め同音不オ、ハラクチイナエンサラハウと囉一あがりこれを引揚不て産神不祭れり今もその例不因て毎年當日右の木を神輿と一村中の新夫不舁か一む利根川の畔不十間四面の池あり祭の前日その池泥をとりて周不置一む而當日神輿を池中不舁入る、不村人池周不羣集一同音不オ、ハラクツテウエンガンバウイ、ツモカウナラヨオカンベエと囉一つ、泥を池より上りむとする人不も神輿不も擲ちてあげてねバ困

いをてさる時昇人の妻どもわびて漸ふ池より上がりせ身を
も神輿をも利根川ふて洗ひ妻のもとて來さる新衣を著るこれ
より村人神輿を受取り元の如く社ふ収むこれ例祭ありとぞ
我慢 我慢とハ努力の義ふ轉言へりこの處水堀村の下ふて
衣川落合の衝あるからふ流頗急あるを舟子共聲を掛け今少
の間ぞ我慢々々と言ひより遂ふ名と爲りありこの處河
水最佳といふ
布施辨才天社 布施ハ江戸より松戸小金を経て水海道へのゆ
くてあり田中ふ孤山あり古ハ湖中の島ありとぞ辨才天を祀
る東麓ふ窟あり別當を紅龍山松光院東海寺といふ眞言宗常
陸國大塚護持院末あり寺寶ふ蟠龍石あり此處ハ關東三辨天
の一ふて詣人羣集一之頭の渡舟を望み曙山の櫻楓を眺め
て頗勝景と稱する不足れり

縁起云昔大同二年七月七日の朝湖上ふ紅龍現れ一の塊を捧
げて島を作る天地震動一夜々光明あり天女里人の夢ふ入り
て但馬國朝來郡筒江郷より來れる事を告ぐ覺めて光を尋ね
窟ふ入れバ長三寸餘の尊像あり乃藁葺の小祠を建つその頃
弘法大師の經過ふ値ひてこの事を語る即大師嚮ふ筒江ふ於
て刻する所あり乃この寺を造り山を紅龍と命け里を天女の
利益ふ資りて布施と命かくて歸洛の後嵯峨帝ふ奏聞一弘
仁十四年田園を寄附一伽藍を造立す然るふ承平年中將門の
兵火ふ遇て衰廢す經基王武藏守と爲て箕田城ふ住する時此
處ふ來り忽互礫場松上の光を見狩衣の袖を刷ひ祈念せし
バ尊像即袖ふ移りぬふを奉持一天慶三年二月將門伏誅の後
この寺を再興一院を松光と命く今の本堂ハ享保の初法印秀
調が建つる所あり

取意○按ふ經基王武藏守非ず介あり將
門記ふ武藏守興世王介源經基と見えり

川市



布施
辨才天社

千五

川市



蟠龍石
 按小龍丈石の事、素園
 石譜卷三、魚龍石
 潭州湘鄉縣山之巖有
 石、中界間有石、中兩面
 魚龍形、作蛟蛇之勢、鱗
 鬣爪牙角甲悉備、尤爲
 奇異、といへり、されど
 り龍丈、黒色、なる由り
 見え、て、この石の青質
 白、車、ある、比、す、れ、バ
 い、さ、く、下、れ、り

大、如、圖
 實希世之珍
 祀爲宇賀神



この社地ふ於て八月朔日毎年風祭相撲あり又巳年の三月八
 必開帳あり岡村の延命寺ふ埋めたる土偶及び駒塚ふ埋め
 三ふ見えて葬送の具
 あるべき由いへり

玉椿登とんえてや布施筈
 白髪と春八ねまれ布施の森

其角
 慎我

日天子社 相馬郡青山村ふ在り手賀沼の北ふ在土人ハ御天様
 といふ一奇事あり凶年の時社地ふ彫く芥を生じて近郷數
 百人の食ふ供す然るふ半年ハ少も無くと村長海老原氏話
 り又この社の周ふ多く生ひさる篠竹を截れば血流出てその
 人不祟ありとて一も伐る者か海老原氏又一奇話をいへり
 四月十八日同村助の妻機を織り居に井四五歳許の僧來り
 りて水を乞ひて自家の井の地を浚ふて吞むに井をり加持の
 隣より水乞ひて諸病の効あふべしとて去れりとの見
 清水ふありて水乞ひて諸病の効あふべしとて去れりとの見
 高き清水ありて水乞ひて諸病の効あふべしとて去れりとの見

川南

字六

禁ぜりる猶水を盗む者断えずとあむ

御寮法性墓

青山村の東都部村大龍山正泉寺

禪宗本尊地蔵菩薩

の後

在り五輪の石塔あり法性ハ最明寺時頼の女あつてこの寺を建立し命けて法性寺といふ然るあつ一夜この尼住持の夢に現れて在世の榮華の爲あつ手賀沼の毒蛇と爲り十六の角を戴き八万四千の鱗を生じ三熱の苦を受くる由をいひ血盆經一千卷を讀誦して苦惱を救すくはむ事を請ふ覺めて後地藏講會を修せしうハ夢あつハ八旬餘の老僧來り明朝手賀沼あつ行き見るべし龍宮あつ藏する血盆經を汝あつ與へむ墮獄あつの苦を免れむと思ふ女人ハこの經を受持すべしとて乃夢ハ覺あつふあつ是地藏尊の化身あつありとぞさて明且手賀沼あつ詣りし水卒あつに動騰あつし白蓮花一莖あつ涌出あつし中あつ血盆經一部あり乃村を一部と命け山を大龍と命け寺號を正泉と改め題して日本最初女人成佛血盆經出

現第一道場といふ血盆經縁起取意

下利根川

こくひ

蠶養川落口以下をいふ南ハ江藏地新田ありこの邊

より安食までを鮪魚さけの絶品ぜつひんとす

川北

堺町

猿島郡の地關宿の對岸結城のゆくてあつて繁昌の處

あり月々六載舟を江戸あつ出あつし以て行旅あつ不便あつすこの下あつガッゲ

といふ處あり下小橋と浦向あつ不屬あつす近齊あつより薪あつをこあつ不出あつし

以て中利根川あつ不浮あつぶ

女夫松

あがや長谷村

あがや長谷村あつ鵜沼あつの傍あつ不あつ在あつり結城あつのゆ香取あつ社あつ不あつ在あつり圍一

丈許あつその葉晝あつハ常あつの如あつく夜あつハ合あつしあつて離あつれあつず故あつ不あつ又眠あつ松あつとと

いふこれを煎服あつすれば難産あつの患あつありとて人々取貯あつふこの香

取社あつより一町許あつ北あつ不あつ乳房あつ觀音あつあり

鵜沼

あがや又長須沼

といふ源あつハ洑谷あつ一谷あつの邊あつより出屈あつ曲あつ三里

餘あつ不あつしあつて小山あつ不あつ至あつり中利根川あつ不あつ落あつつこの處あつハ嘉永四年あつの堀

川北

三十一

嶋郡大光村十石國玉大明神後嶋郡塚左京村五石八幡宮長須坂村

治部丞あど見えり

保地沼岡田郡飯沼の下流あり末ハ二分れ法師戸不至りて

中利根川不入るその下の方ある流平時ハ水無し

衣川落口相馬郡大木村不在りて、の川中不我慢といふ處あり

対岸ハ水堀村あり衣川本名ハ毛野川不て續日本紀卷九

天平寶字二年條常陸風土記新治郡注不見ゆ延喜兵部式不下

野國衣川驛倭名鈔不下野國河内郡衣川と有るも專二の川不

因りての名あり衣川歌枕名寄卷九不四不懷中抄を引りこの

國誌上卷相馬日記卷一下野國志不と見えり

普門山禪福寺筒戸村不在り諸國圭齊錄下總國禪宗不十三石

八斗余相馬郡筒戸村禪福寺と見ゆ○相馬日記卷三云筒戸村の禪福寺

といふ不詣て、洪鐘の銘を讀む大日本下總州相馬郡筒戸

村普門山禪福禪寺万治三庚子天七月初三日住持當山中興開

山大麟玄綱比丘尼銘焉とあり本尊ハ平將門が渴仰せ一等身

の十一面觀音の木像ありと上總國の花岡といふ里より遷

一まありせとありといへり等身の由來ハ二中歴不見ゆ二中

二造佛歷佛像寸法之條ハ五尺者弘法傳漢土時人長寺の傍ハ

也近代謂之等身と此條時鄰が標注不見えり

最舊ハ石卒都婆あり鑿りる字無れバその姓と名とを知

りず寺僧ハ相馬氏の墓標ありといふ又玉山宗雪慶長十六巳

二月今日と鑿り一五輪あり連歌師あどのこ、ふて身まうれ

るふや

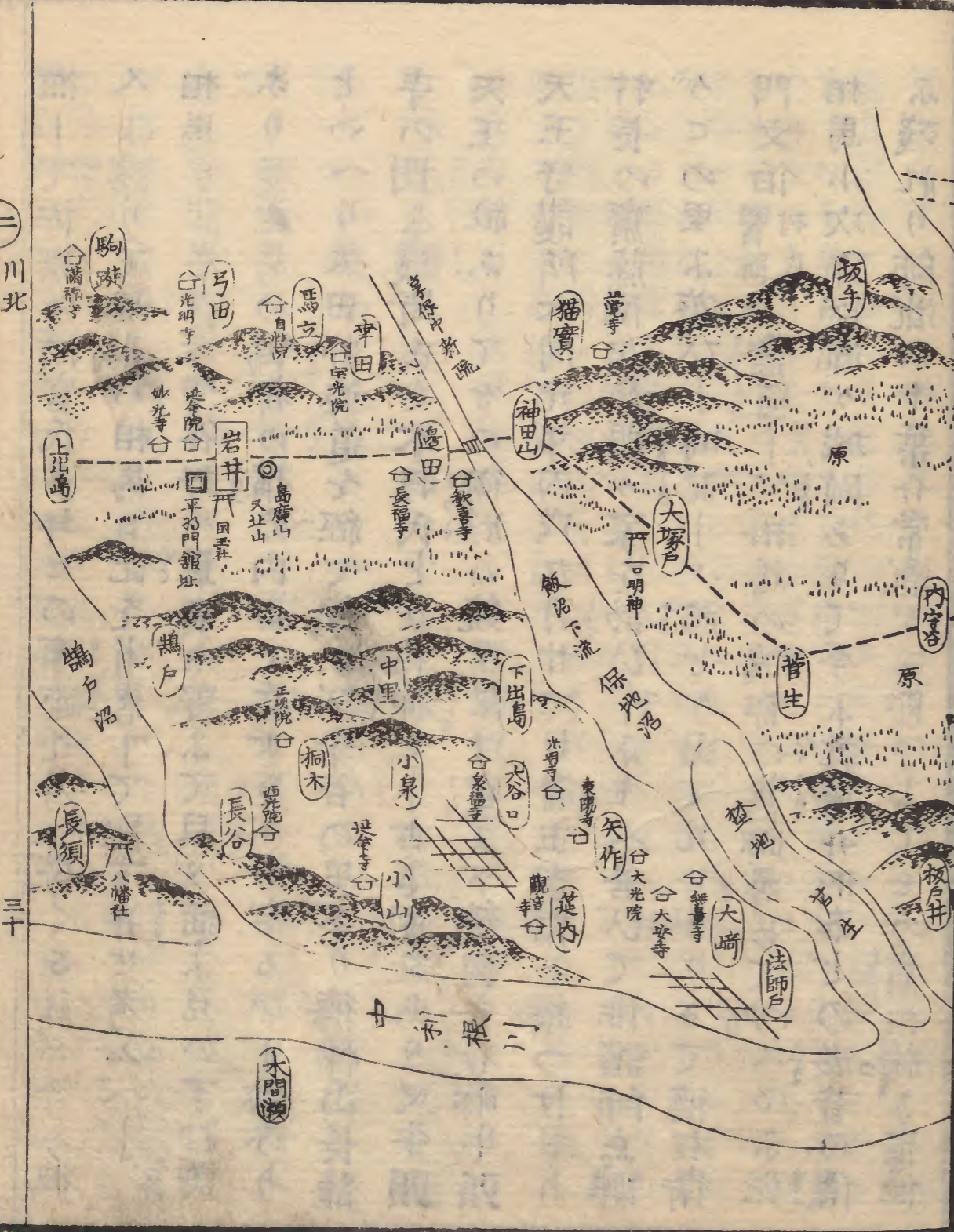
平將門舊址 平將門の事ハ將門記大須本大系圖扶桑畧記卷九

五大鏡卷一外記日記卷一二舊本今昔物語卷廿五古事談源平

盛衰記卷廿三本朝文粹卷二元亨釋書卷十皇和真俗通卷十二

大日本史卷卅二日本外史卷一不見えて遍く人の知る所あり

平新皇將門城址圖



三 川北

三十

然して佐原の清宮氏多年この事迹を考へ勞くされハ今ハ彼人ふ譲りて此ハ相馬日記を省畧して記す并せ考ふべし相馬日記卷三云守谷野ハ最廣き野ふて目と遙不見かすむ許あり是相馬の偽都の構の内ふて兵士らぐいむらひ跡ありといへり矢田部海道を経て行けば守谷の里あり德怡山長龍寺の門ハ淺野氏と木村氏とが花押せし古き制札あり又牛頭天王の社ありてその御形ハ鏡ふ坐す裏ふ下總國守谷卿牛頭天王守護所大同元年丙戌九月廿一日神主吉信と鑄つけたり村長の齋藤德左衛門が家を訪ひし主人喜びて俳諧師鳥醉がこの里ハ遊びし時記し記とう出て見せとりさて德右衛門文伯醫師木村氏嚮導して相馬の偽都の舊跡尋めて分るふ先相馬小次郎師胤が城跡ありて今ハ乾壕弁形などの形昔の儘ふ残れり師胤ハ千葉介常胤が三郎子ふてその裔相續ぎ應仁

年中までこの城主ありといへり按ふ相馬氏の没落ハこれ國眞壁郡下妻の多賀谷修理大夫高經が小田菴滅亡の歴不乗じ地を廣めむとて下總國岡田郡古間木城の渡部周防守元綱を攻めし事を常總軍記卷十二ハ記し相馬城方如勢の兵羽生式部石塚右京土岐越前荒木三河相馬求馬土岐彈正添屋を以て相馬郡守谷高戸の兩城主相馬左近大夫治胤を伐し田原落城の後佐倉東金等と一時見ゆかくて明年七月十一日小領下總國の内ハ同相馬菅沼山城守定後元和といふ年の頃土岐氏の君こふ住まれし上野國沼田城へ移らしてよりこの城遂ハ廢れぬとぞ島の中道を東へ廿町餘行けば大塚曳橋かどいハ處あり平臺といハ最高き岡ふてこぞ將門が住まし所ある又眩く許の深き壑を渡りてハ幡廓ふ移る將門が齋き祭りし妙見八幡と申すがこふ鎮座しを今ハこもり山の西林寺ふ移しまるりせりといハ山下文ふこもり山の擁護山清淨光院といへりとぞと見ゆ諸國圭齊録下妙見八幡と申總國禪宗相馬郡ふ二十石西林寺と見えり

川北

す由ハ妙見菩薩と相殿不祭れる不ヤ昔物語不將門が八幡の
詔宣を偽り一事をいへりこの所より八千町の田面打越一奥
陳涉が狐鳴不近き事ありこの所より八千町の田面打越一奥
山一臺向地赤不け岡村がううあどいふ所々目路途不ぞ見
渡されたる齋藤氏語りぬりく古ハ相馬の偽都の周ハ都て湖
湛へてまなき要害の地あり一を寛永といふ年の頃衣川の
流を南へ決りて数万頃の新田をバ開かれ一といへり今も猶
田の真中不池残りて蓮ふどの生ひたる多うり熟相馬と命
一名の所由を考ふる不所の體淡海の中の一庭おれば狭場と
いひむを音便ふさうまとも轉一いふふるべ一按ふこの説
猿島と小島の義あるべし漸不水涸れ泥乾きて許多の村々を爲し長
洲等のとさるかり一が漸不水涸れ泥乾きて許多の村々を爲し長
あるべしと賀谷高古の事ハ知り後世の書ふがら常總軍記
卷十二不多賀谷高古の事ハ知り後世の書ふがら常總軍記
田郡を攻むる諸士極めば猿嶋郡若井郡若林郡出嶋中里皆掛猫内
筵打の邊の諸士極めば猿嶋郡若井郡若林郡出嶋中里皆掛猫内
見えされどこの末不猿嶋の勢もや大不驚き岡田郡を下妻へ取

瀨主膳菅生の石塚權兵衛内守谷の橋本石見野田の野田角牛
實珠花の平岩主水大山の大山一學以下七餘騎不馳來る
といへる野田寶珠花をおきてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
べし又長洲ハ古長須郷とてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
土宗後嶋郡長須郷とてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
四石後嶋郡長須郷とてハ相馬郡の地あるを以て考ふ
原といへるハ田中の離島不て縦横不上道一里餘の廣野あり
昔淡海の廻れる時ハえといハぬる一島の島ありむとぞ思
ひやれる、今この野中を行く道をかうう海道とよべり抑
かううといふ名何とも心得がなきをよくおもへハ將門記
今昔物語ふと不辛島と見之をがううといハ訛れる不て辛
島の廣江といへるもこの周の田とあり一所を指せるあり
この辛島廣き地不て古ハ郡の名不もよびたる將門記不常
陸介良兼が將門を襲ひて下總國豐田郡栗栖院常御殿を燒
き一餘不將門を勞身病隱妻共宿於辛嶋郡葦津江邊依有非
常之疑載妻子於船於廣河之江とあるもこの邊あるるか
さりバ以相馬郡大井津号爲京大津とあるもこの邊あるるか

川北

三二

くて天慶三年二月十三日貞盛秀卿が將門の宅を焼き一條
新皇擬招弊敵等引率兵仗隱於辛嶋之廣江と有りこの時燒く
れ岩井卿島廣山故跡と稱す者此營所ありさうさうハ今相
馬郡事ある時ハ守谷不棲する者此營所ありさうさうハ今相
居と事ある時ハ守谷不棲する者此營所ありさうさうハ今相
の戦始ハ且辛嶋郡之北山張陣相待矣と云へりかくてこの日
ひて敗死せるも直北居勝ちて敵を逐ひ却て風下と爲り再戦
の事知るべしこの餘ハ清官氏の考を待つ又將門記古事談不
ハ島廣山と見ゆこれハ廣き島山然よふべき事あり佛
島といふハ堀を廻りて構へ一所草木茂り暗がりておぞ
ましき古墳あり中少許艸おひぬ所あるを強く踏めバ地不
響ありて聞こゆこれヤこの兵器おとあま埋ミ一が故不そ
の鍊氣不因りて草も木もおひいでぬあるべし里人これを將
門が墳ありといへり佛島と名づけ一ハ傍不地藏の石像又ハ
何くれの佛の石像立てればあり坂を登りて高き岡不六日堂
あり古き松おと有りて眺望好しき所あり將門がうまれ一跡

ありといふ熟この堂の貌を見る不古墳の上不建てさるあり
これ將門が骸を埋めむ所不てかの佛嶋ハ伴類の屍不ヤ兵
具おと埋めさるべし米野井の桔梗が原といふハ將門が妾
桔梗の御前といふが殺されたる所不てその墳あり今も桔梗
ハ有りおぐら花開く事おきハこの御前が怨不因れるありと
いへり海禪院といふも間近一そこハ將門が高野山の貌を摹
して先祖の墓を造り一所ありこの寺の新皇堂といふハ將門
が靈を祭りて國王明神と稱へり按不諸國圭齊録下總國禪
高野村海禪寺今日廻り見一相馬の偽都の體を思ふ不上道四
と見えたり里許が間不て湖の中島おれば上もおき要害の地おれど朝廷
不叛き奉り一うハ僅九年をくり不一門悉亡びふき

つ波の風おあれむ幸あめ廣江おせおとまきこえは 高田與清

按不相馬日記不相馬小次郎師胤ハ千葉介常胤が三郎子あり

和田村の由右衛門あるがこの二人の事ハ勸善録不載せり
そと勸善録ハさよてありぬ人をも載せざる謂あれどこの二
人ハげふ載すべき績あれ
バ引きて因ふ下不記す

勸善録中巻云下總國相馬郡岡村の林兵衛和田村の由右衛門
藤兵衛三左衛門ふと多く孝貞の友聚まりて廢田一町九段許

を開きりりその廢田ふ澁田鹿田ふといふ名あり澁田とハ窪
き田ふて水常ふ溢れ稻苗水の爲ふ腐れ廢るをいふ鹿田とハ
土質よろうろず水も足りぬをいふとふむその里の佐兵衛

七郎兵衛中畧ふとさる廢田ふとりるを林兵衛由右衛門藤
兵衛三左衛門三輩田主ふ力を合ハせて墾開き今ハ良田とふ

りて年ごとの貢米滞ふく奉れりといへり

大鹿城址 天正年間小田天庵の麾下あり一六鹿左衛門の居處
あり常總軍記卷十一云爰ふ下總國相馬郡小文間一色宮内ハ

小田の味方ふて有り一この頃佐竹ふ降りて近郷を脅し手

を廣くせむと思ひ一がかねて中惡うりにれハ先大鹿ふ攻懸

て大鹿左衛門を亡不一かの世帯を押領せむとて二百餘騎に
て不意ふ大鹿へ押寄せり時一も大鹿左衛門ハ所勞ふて居

さりたる所ふ関をあげ一うハ家子須川平治を呼び何者うよ
せつりむ思ふふ小文間の一色めあらめ憎き奴うふさりあふ

り我此體ふてハ中々矢の一筋も射出難一足弱を片付て
我ハ腹切るべ一汝宜く片付くべ一と江や一うハ須川表ふ走

出て家人を聚むるふ漸雜人共ふ五十人許あり一うハ先奥方
を始女童を皆呼集め後の山傳一てかりき命を遁れ同所の弘

經寺へ隠したり是大鹿が菩提寺ありかくて足弱を片付れ一
うハ今ハ心安一と須川を始切て出て散々ふ戦ふその隙ふ大

鹿左衛門心静ふ切腹すこの文の續ハ下の
小文間條不記す

按に大鹿の城址ハ弘經寺の三町むかり南ある山上ふ在り山

三川北

三五

南の田園を城下といふ其處の田中不鹿塚とて有るハ由有り
げあり

大鹿山弘經寺 諸國圭齊録下總國浄土宗部云五石 相馬郡相馬郷 弘經寺

常總軍記卷十一云大鹿弘經寺ハ浄土宗あり下總國岡田郡飯沼弘經寺の隱居所ありといふ又結城ふも弘經寺といふ有り同宗あり中畧大鹿ハ十八檀林の外ふて百石御朱印あり權現様眞那板不御書下トあり因て今ふ眞那板御朱印といふありすべて浄土宗常總ふ弘經寺といふ寺三寺あり

大鹿山長禪寺 鹿島日記云近嶺德基と共ふ最高き石坂を登り

て大鹿山長禪寺不詣つこゝの樺利根川不臨きて西南の空遙不富士峯のみさけのれとるえも言ひ難一寺ハ妙心寺派の禪宗不て文曆といふ年の頃織部時平てふ人金を施して建つとあむ時平が法名を記しとる位牌不大悲院殿花輪平公大禪定門と見ゆこの里ハ昔大鹿左衛門某が住ミ一岩の跡ありとぞ按不大鹿の城址ハ既不上言へるが如し此處ふい岩の有り一あるべし城址ハ此處の西稍北不在りて十二三町を隔つ

さてハ麓ある取手宿ハそれ不因れる名あるべし中畧 近隣不

臺宿村あり取手宿より東不續きとり古き名ハ何といひむ

今臺宿といふハ取手よりも高き所不在る宿あれハあるべし

臺ハ夕平ヒラの省謬ある由下ふいへり

按不諸國圭齊録下總國禪宗部ふ五石三斗 大鹿村 長禪寺と見

ゆ境内不光音骨堂あり 寺寶ふ光音の 光音ハ此邊ふ四國八十

八ヶ所の靈場を模し設けとる人ありそハ

大鹿山長禪寺 同村 地藏堂 不動院

臺宿村 同村 地藏堂 藥師堂

取手 同村 西照寺 念佛堂

吉田村 同村 嘉納院 本泉寺

同村 同村 藥師堂 安養寺

同村 同村 成就院 地藏堂

三川北

三六

取手宿 江なり水戸へ行くの官道よりて地名ハ上の山へ大鹿
氏の岩有り一ふ因れるるるべし此處の聞人澤近嶺の家ハ新
町ふ在り油屋與兵衛といふその詠歌を伊能願則が撰ひ載せ
るる香取四家集の末ふ清官秀堅がその小傳を擧げりその
文ふ澤近嶺原姓谷澤 小字吉次郎又定次郎稱與兵衛號月舎晚
號梧桐庵相馬郡取手驛人年甫二十八入村田春海之門與清清水
濱臣等切磋磨礪其作歌雖好新古今集樣能占地歩不流纖巧中
畧天保九年戊戌八月二十二日歿年五十所存有雜記二卷梧桐
菴歌集一卷といへり詠歌多うれハ因ふ一首を擧ぐ
護山禪師甲斐國ふ歸りける馬の餞ふ法華經を贈りてよめる
かひくの雲のあゝふ君すまばとに影にまよものを 澤近嶺
因ふいふこの護山禪師ハ甲州惠林寺の隱居ふて長禪寺ふ住
ひ道徳高き禪師ありたり一時近嶺が世ふ冤鬼ハ無一と言争
を誘ひ連れて行きて物語りひつゝ禪師の教のまふ立す者

母ふぬりさて戒めたるハ丑時ふ佛前ふ磬の聲聞ゆべし
れどゆめ驚きそといひたりハ磬の聲せりこの時禪師法衣
を著手ふ線香を持ちて衆人の中ふ近嶺を後ふ居てそこより
ふ至り暫讀經一法衣の袖を裏げされバ屈まり居てそこより
窺ひたるふ黒禪子の知れる家の女髪をバ島田といふ結ひ柳絞
の單衣ふ見ると魂消えて色絹裁入れさる帯して墓の前ふ合掌
物をと見ると魂消えて色絹裁入れさる帯して墓の前ふ合掌
母の爲ふ追りて縊死するを百日誦經して成佛ふ歸りそハ継
せりが己八日ふあれるるありとぞ當時ハ聞く人多くて誰も
知りたる事ありとあむ
この宿の本陣ハ添野民部の後ふて舊家あり庭ふ水戸景山老
公の歌碑ありげふ御歌の如く利根川の渡船取手渡眼下ふ見
え富士を雲端ふ望みて景色ハハむ方あー
きてゆくさきのとりてのわいり思ふ方へとくつきふり 景山老公
床ふ紙貼りて下方ふ纒ふ瀑布の圖かきさる上ふ御筆を添め
るふ二の御筆迹ハ裸装
出ぬの衣やさるす春すきて夏きてふるの向ふの 景山老公
三川北 三十八

この家の後ふ一の古道あり佐倉街道といふそハ常陸國筑波郡山王新田ふて蠶養川を渡り山王渡下總國相馬郡山王村ふ入り毛有を經山王道大鹿ふ至て守谷道七合一取手ふ入り此處を過ぎ牛頭天王社側よりオッホリふ出で利根川を渡り中峠村の内ある中峠といふ地ふ到り終ふ佐倉ふ赴くをいふ按中峠の峠を寺田德基が問ひたる高田與清が答へて相模國大住郡の轉杷村といふ嶺あり上總國市原郡引田村て杷野の轉杷村といふ嶺あり上總國市原郡引田村記の中峠の説ハ誤り中尾落冊子ふ造り四方を見渡せばよたを呼ひて吾ら村ふ荷峯養老峯有りまゝ下總ふて山の崖をゴ隣ある立野村ふ荷峯養老峯有りまゝ下總ふて山の崖をゴヒヨといふ野村ふ荷峯養老峯有りまゝ下總ふて山の崖をゴこの説げふ理あり

本多氏城址 井野村ふ在り本多作左衛門重次の城址あり治房總記天正十八年八月九日領地拜領上總部ふ小井戸本多今も其作左衛門重次三千石と見え井野村ハ臺宿の東北の方に續の處を城内といふ鹿島日記云井野村ハ臺宿の東北の方に續

字あれバ舊き城の跡あるべし又花輪臺といふ所あり織部時平が法名を花輪禪定門といひしを思合ハするふ時平が棲所ありはむ計り難し云下ふ埴輪作りはむ又ハ武隈の北といへど誤臺宿より西北ふ向て行けば左ふ井野天神社有り猶行けば右の御林の中ふ御墓山ありその西北ふ屋敷といふ地有り昌松寺のさて本路歸りて左ふ普門院の故墟あり城内の東あり後今處の移りといふされども由緒あるを以て今も年ごとふ米一俵を賜はるとぞ今普門院ハ此處より北方ふ在りて左方同村昌松寺ふ隣り桑原村光明寺と三處對立す又本多家の香火院ハその上ハ城内あり南ふ堀内との隣村ある青柳の本願寺ありその上ハ城内あり西ふ萩原地あり路を隔て、右ハ花輪臺あり猶西北ふ行けば山王渡不出づ

小堀河岸 井野新田の地ふして岡堰より蠶養川を堰き入れらる流を利根川不落す處あれば然いへり鹿島日記ふ出づトハ井野新田ありといへるハ利根川ふ臨こる地ふして船宿稱呼ふつきて誤りたるあり

三川北

五家皆寺田氏あり徳基が家あり今水神を産神とす例祭六月
廿日夜入りて神輿を船にて利根川に浮べ流し隨て靜し下
るこれに御濱船の幕を張り鉾を立て夥く挑燈を掛け笛大
鼓囃物の聲高欄の内より起るこの時後舟より烟火を擧ぐその
數甚多しこれを見る人兩岸に雲集し持連ぬる燈八月の如
く水中に倒映して金波を生じ傍涼風も暑を消し酒食の興を
添へて寶ふこの地の壯觀あり

第六天山

小文間村不在りて松樹茂りたる山あり天明年間神
道德次郎紫紬泰助おと言へる賊首黨を結びて此處に住めり
今も第六天社の西一段依き奥の窟の迹ありといふ相馬戸記
卷三云酒
詰村にて水戸路を横さまし小經て用水に沾ひて下る馬手の方
の見やりある山に相馬郡小文間の第六天山といふこゝに昔
ハ盗人のあまた籠り居て往來の人を引剥おどせし
ふ今ハ遍き大御惠ふ因りて然る煩も無しといへり
あるやいふ小文間山の末の松をそえたるむかしのを

御墓松

小文間第六天山の東に在りて利根川に近しこの邊す
べて西方
といひその山下を南子ガラといふ川の向ハ芝原あり 小文間の城主一色氏の墓標あり
古ハその下五輪塔ありといふ頗大樹あり景色最佳し

一色氏城址 小文間の戸臺に近き處に在り詰丸と覺しき處に
天神社あり下の谷を城内といふ

常總軍記卷十一云一色爲濟まゝり悦びて大鹿が館に火
をかけ勝鬨あげて酒宴して居りたる大鹿が家人かぬて
左衛門が遺言として聳の高井十郎にこの由を告げしハ高
井大に驚き又ハ怒て急し勢を集めたる小常々一色ハ我慢押
柄して動れば鬪諍を好し者なれば隣城と睦らわず又大
鹿ハ常小柔和しして志平ありし者にて人これを貴びれば
憎き一色が仕業うか今少早うむふハ討せまじき物ある
を残念至極ある次第として大に怒り其よりして我れと集り

江防宿野櫻訪漁
 正消愁赤鯉千條
 網解纜一才鈎月
 五烟柳浦舟繫碧
 蘆洲好景何當比
 菴公赤墜遊

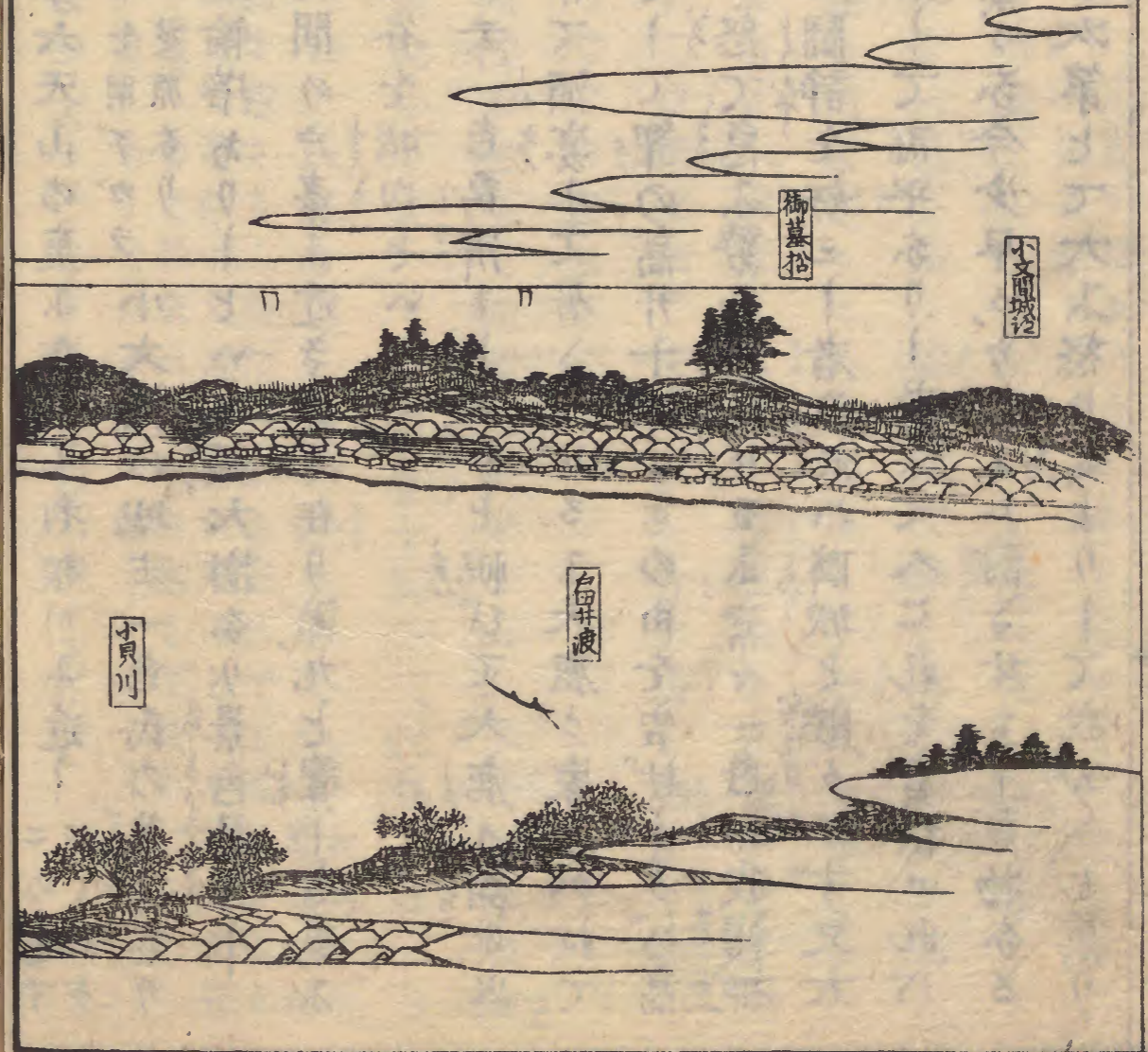
昇吟孝

引揚と

魚の光りや

夏れ月

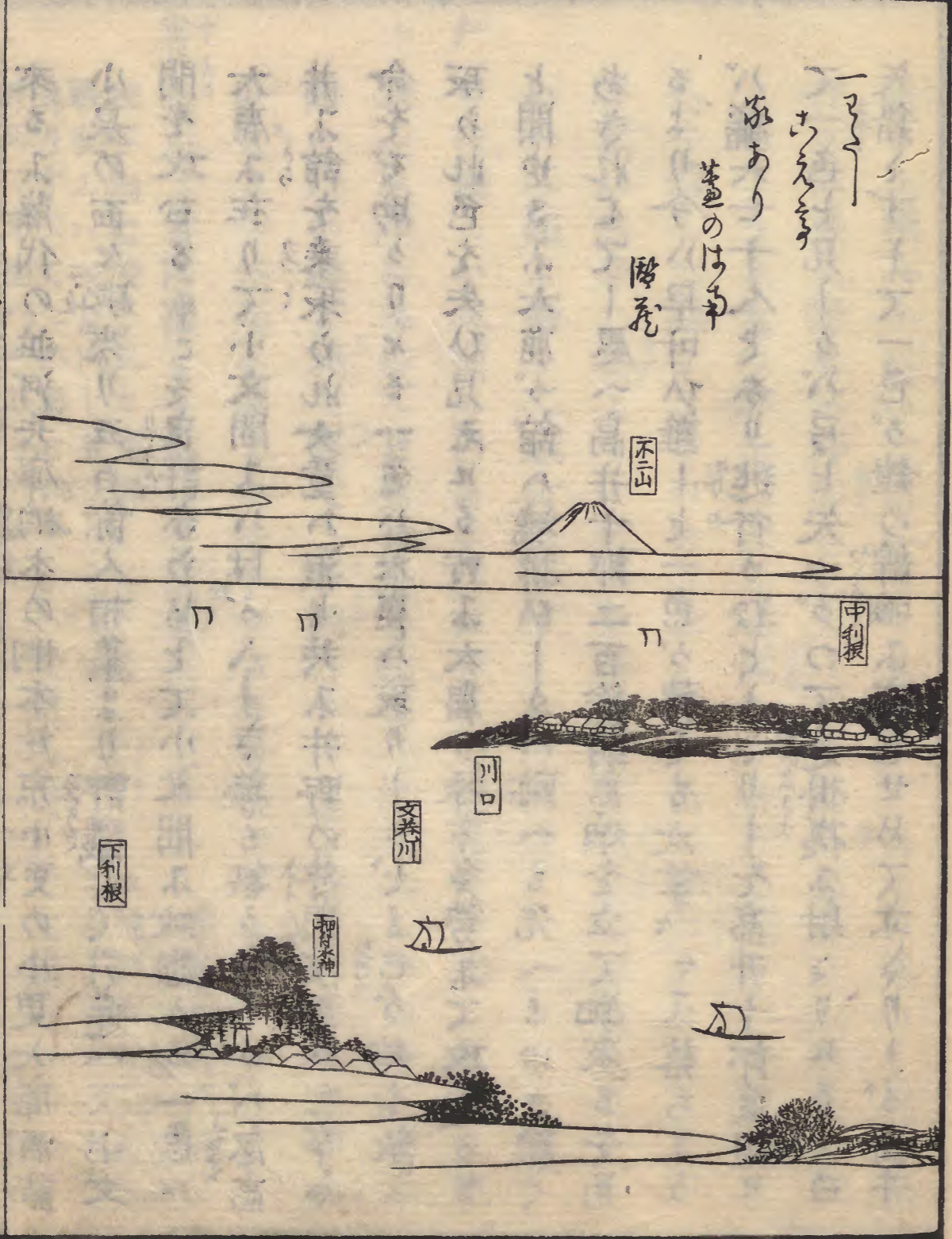
柳庵



遊あり
 菴のはる

勝苑

不山



三川北

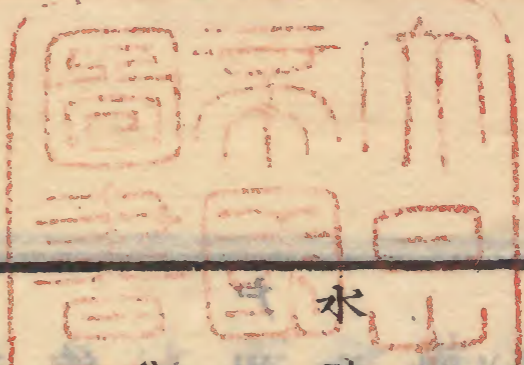
四十一

来るふ藤代の並河兵庫柵木の柵木左京小更こゑの小更大膳酒詰
小泉の面々馳を来り五百餘人相集まり評議ひやうぎして引違へて小文
間を攻むる事こそ良計りやうけいかりめとて小文間こぶんま不攻懸せめりくる一色ハ
大鹿おしか不在りて小文間こぶんまハはぐくく一色ハ大鹿ハ取りとりと己おのが館たねを敵かた不
命いのちをぞ助たすかりとる一色ハ大鹿ハ取りとりと己おのが館たねを敵かた不
取りれ色いろを失うひ見えとる所ところ不な大鹿おしかが味方あじ多勢おほしふて攻懸せめりくる
と聞ゆるきこふ大鹿おしかが館たねハ焼拂やきひひくバ跡あとへと先まへとゆき難がたく
あきれたてたて一處いへ高井たかい十郎じうらう二百餘騎馬烟かぶを立て馳を来るを見
るより今いまハ早叶はやひ難がた一色いしきが勢いきほどと次第ついで々々々々ふ落ちおちちく
バ纒むす六七十人むそとかり逃のが行ゆくむととりりを高井たかい十郎じうらう追掛お追掛おれ
て一色いしきと見みくバ弓ゆみと矢やつがつつて追掛お追掛おれ射やりりとるその
矢錯や錯さくずずして一色いしきが鎧よろいの綿わた噛かみみ不な脊せ卷ませめて立たりりく高井たかい

固とより精兵せいへいふれば一色いしき二言にげんとと言いはず馬うまより落ちおちち一處いを高
井たかい郎らう等らう久野くの虎次郎こじらう起おちちと立たてず首くびをとる高井たかいハ大鹿おしかをハ討
とせとせとろと當あたの敵かたを打取うちて勝鬨かちあげ味方あじの面々おもむへ一礼いちらいして
高井たかい館たねふぞ歸かへりりる由よしあき企きして一色いしきハ滅亡めつたうししるこそ不
覽らんふれ高井たかいハ其そのより小文間こぶんまを普請ふしぎして究竟くわうけいの要害やうがいありりく
ハ小文間こぶんまふ移うつりて威いを逞たくまくくりりる

戸田井渡とだいわた 小文間こぶんまの内うちある戸田井とだいふて鸞養川らんやうがわを渡わたる處ところあり筑
波つば山東とうとう北きたふ見えて景色けいしき最もよ一相馬さうま日記にちぎ卷まき三さんふ戸田井とだいハ小文
間まの内うちあれど堤つゐを隔へて、子飼こがひ川の川邊がわべふ住すむ田居いふれば外と
田居いといへるふやといへるハさる事ことあるべし

書かき卷まき川がわ 常陸とちぎ國くにより落おつる鸞養川らんやうがわの落口おちぐちあり
堀ほり子飼こがひ之の渡わたと見え東國とうこく土人とにんの説せつふ文間庄ぶんまのぢやう立木たき村むらふ文間ぶんま明神あきみかみ
戦いくさ記きふハ古貝川こがひがわと有あり土人とにんの説せつふ文間庄ぶんまのぢやう立木たき村むらふ文間ぶんま明神あきみかみ
爲なりすべてこの邊への地ちをと小文間こぶんまの間まふて文間川ぶんまがわといへる
并ならせて文間ぶんま八十石はちじゅういしといふ



誤れるありといふ古歌

水草のかきかせともなれぬはふまき川といはふるべし

國花萬葉集卷十下總國部云書卷川名所不出按に名所景

物不見古河渡と同一流あり水上あり云これハ何處あるう

知り難し猶考ふべし

水神社 戸田井渡の東押村村に在りこの村桃園多し土人曰く

この村の一里許東に大平村ありそこは住まぬる人を尊びて

御大平様といふ一日此處に來りて魚を釣れるを水神甚怒

りうたう潜牛うたうに乗り來りて釣竿を奪うばはむとせしうつらハ甚驚つらきて側を

る藤蔓つたづを投なげたる牛の右角うまに係りたるを互に牽合ひする

ふ終はる角折れて別れわかれりしとぞさればこの神體ハ右角うまなき

潜牛うたうに乗りたる木像あり別當徳満寺より出づる御影も同じ

今も村人水神の嫌きらひ多ふとて藤を用ゐず又大平村の人を嫌

ふといふその御大平様ハ今もその村むらにて祭りて大平おひら権現けんげんといふ

利根川圖志卷二終

